

# 脳梗塞と歌

——フォーク・シンガー達が、療法としての音楽を体験する——

マイケル・スプーナー， ミドリ・トーキン，  
アレン・クリステンセン， カズコ・トーキン／山崎 遼（訳）

## 1. 音楽，記憶，民間の伝統に関する思い（マイケル・スプーナー）

伝統は、先祖へと続く道である。私たちと先祖の足取りは、わずかに違うかもしれない。だが、道は変わらずそこにある。そして道しるべも、親たちの見てきた場所に立っている。これは、壮大な国の伝統などにのみ当てはまることではない。小さな日常の伝統、つまり民間の伝統にも同じことが言える。民間の伝統は、家族・友人の輪などの小さな輪の中で育まれる。大きな伝統と同じく、このような小さな伝統も、私たちに教えてくれることがある。我々が誰であり、どこから来たのか、ということだ。

私たち4人は、他の友人たちも交えて、週に一度集まって一緒に歌を歌っている。これは、友人であるベリー・トーキンが2002年に脳梗塞で倒れてから、私たちが始めた伝統である。ベリーはユタ州立大学名誉教授であり、その著作は世界中で読まれている。弟子たちの多くは今や著名な学者になっており、またベリー自身も数多くの賞を受けている。しかし、週に一度顔を合わせる私たちにとって、トーキン教授は親しい友人であり、聡明な身内であり、ジョークや物語の語り手であり、レパートリー豊富なシンガーである。ベリーは私たちの先輩なのである。

ベリーによると、脳梗塞のあと、記憶していた800曲もの膨大なレパートリーは脳から完全に消し去られてしまった。それだけでない。多くの脳梗塞患者と同じく、ベリーは話す能力をほとんど失ってしまったのである。歌うどころではなかった。しかし、私たちのメンバーは皆、医者でも超能力者でもない。たくさんを大勢の人に教えてきたベリーの、ただの友人や家族である。私たちにできるのは、歌を歌うことだけであった。それ以来、私たちは毎週火曜日にベリーと一緒に歌う集いを始めた。ベリーが少しでも楽しんでくれればと思いながら。また、歌うことが記憶の回復を助けるかもしれないとも考えていた。

ベリーの脳梗塞は、西洋医学で「ブローカー領」と呼ばれている脳の部位で起こった（ブローカーというのは、記憶と脳について研究していた学者の名前である）。ブローカー領は幅5センチ未満で、左耳の近くに位置している。そして、人が言葉を発する際に重要な役割を担っていると考えられている。言語に関する知識がそこにあるというわけではないが、人が音声を発する際に用いる機能をコントロールしている。人が何かを言おうとするとき、その意思は必ずブローカー領を通る仕組みになっており、ブローカー領が、唇や舌、声帯に指令を送ることで言葉が形成されるのである。また、言語と似通った構造をしている他の認知的な作業にも、ブローカー領が関わっていることが証明されている。例えば、音楽がそうである。

脳梗塞がブローカー領で起こると、血管が詰まり、酸素量が減少する。そして、それが脳組

織の萎縮を引き起こす。その際、酸素の欠乏が続いた時間によって損傷の程度が変わる。患者は言葉を理解できるし、コミュニケーションを試みることもできるが、話すこと自体は極めて難しくなる。失語症を経験する可能性もある。話す能力の喪失である。そして、どうやらそれがベリーに起こった事らしかった。

脳の他の部位が、ブローカー領の失われた機能を補おうとすることもあると考えられている。その部位のひとつが右脳にある。右耳上部の近くで、だいたいブローカー領と対称の位置にある、「右のブローカー領」と呼ばれることもある部位である。脳卒中の後、右のブローカー領は非常に活発になり、時には過度に活動的になることもある。これは言語を生成するブローカー領を補助するためだと考えている研究者もいる。ところが、残念なことに、この右脳の過度な働きは、実際はブローカー領の回復を妨げてしまう可能性がある。言葉と音楽を操るために、似通った脳の機能が必要という事実を考慮に入れば、この右のブローカー領が音楽を統御する部位である可能性は十分考えられる。このことから、歌うことによって右の部位を普段通りの仕事に専心させ、過度な活発化を防ぐことができると考えられている。そうすることで、右脳から邪魔されることなく、ブローカー領は回復に専念できるのである。

音楽は言語と深く関連しており、音楽の構造は言語と似ている部分があると指摘されている。例えば、音楽には文法のようなものがある。また、音楽においても言語においても発声にはリズムと調性があり、当然ながら、どちらも喉と口にある同じ筋肉を使って声を発する必要がある。また、音楽は感情とも密接な関係がある。特定のジャンルの音楽（感動的なラブソングや愛国的な国歌など）のみが感情的な経験と結びつくわけではない。文化によっては、特定の調が決まった感情を呼び起こす場合もある。例えば、西洋音楽における短調は、暗く、寂しげで、謎めいて、哀しそうだとか覚される。

ブローカー領を損傷した人の場合、歌の持つ言葉と音楽と感情が関わりあうと、それらが連携し、相互に助け合う可能性がある。例えば、曲とリズムは筋肉の記憶を刺激し、言葉の発し方を思い出させるかもしれない。また、音楽を聴くなかで感情が呼びさまされ、言葉へのアクセスが加速されるかもしれない。

最近の研究では、脳が他者との接触に反応を示すことも分かっている。一般的には、年をとるに従って人間の記憶力は低下する。だが、一人暮らしで定期的な社会的交流をもたない人に比べると、たくさんの友人と多くの交流をもっているお年寄りは、記憶力の低下が少ないことが明らかとなっている。このように、社会的な接触は脳の組織をリフレッシュさせ、再び成長させることすら出来ると考えられている。

生涯を通して、トーキン教授は数百に及ぶ曲を覚え、研究し、演奏してきた。しかし、発作の後、トーキン教授は不安になった。それらの曲を永遠に思い出せないのではないか。このことを医者に話してみたが、希望的な返事は返ってこなかったという。「ああ」と医者たちは言った。「お気の毒ですが」。

しかし、家族や友人の奏でる音楽を通して、また皆と一緒に歌うことを通して、ベリーは曲を思い出し始めたのである。この過程はゆっくりで、完璧ではなかったが、時間が経つにつれて、歌の断片や、時には歌の全体がベリーの記憶に突然舞い戻ってくるがあった。ベリーにとっては、まるで脳の中に閉じ込められていた曲たちが、新しい出口を探し当てたかのようなようだった

という。そして、曲の中にある言葉の断片を思い出すにつれ、ベリーの言語能力も全体的に回復しはじめた。音楽療法士などは、歌うことと社会的交流が、ダメージを受けた脳を刺激して回復を助けたのだ、と言うかもしれない。音楽、言葉、感情、そして人とのつながりが一緒になって、彼の自然治癒能力に少しばかりのエネルギーを与えたのだ。私たちはそう信じている。

ベリーは、歌の多くを先人たちから教わり、私たちはそれをベリーから教わった。私たちは医者でも、脳学者でも、音楽療法士でもない。ましてやプロの歌手でもない。しかし、それらの歌をベリーと共に歌うことで気付いたことがある。歌が、伝統を携えていることだ。それが幾世代にもわたって伝わってきた伝統であれ、私たちのグループのような、新しくプライベートな伝統であれ。私たちは知っている。歌を通して、ベリーの脳が自らを治癒しようと努力していることを。

伝統は、先祖へと続く道である。そして、友人であり家族である先輩を救う道として、私たちが選んだのが伝統音楽であった。その道を通して、先達が私たちの元へ帰ってこられるように。

## 2. 発作の日（ミドリ・クボタ・トーキン）

7月4日はアメリカの祝日である。その日は、普段働いている人も、そうでない人も、家族や友人との時間を楽しむ。ボートに乗ったり、キャンプやピクニックに出かけたり、ドライブに行ったりする。

2002年の7月4日、ベリーは暑い中、家の前の庭で育ちすぎた生垣に手を入れていた。作業を終えた頃には暑さでひどく疲れたようであった。休息をとり、シングルモルトのスコッチを二杯飲んだあと、ベリーは夕飯をとって眠りについた。朝になると仕事に行く準備を始めたので、私は朝食を出し、その後ベリーは家を出た。

ベリーが仕事をしている間、私は裏庭の手入れをしていた。その日、昼近くになってベリーが帰宅する音を聞いたので、私は不思議に思った。普段ベリーは夕飯の時間までオフィスにこもっていることが多かったからである。私はそれから30分ほど庭仕事を続けたのだが、家に入ってみるとベリーがベッドで横になっているのを見つけた。どうしたのかと尋ねると、ベリーは答えた。「脳卒中だと思う」私はただちに娘のカズコを呼び出し、すぐに二人でベリーを病院へ連れて行った。この時点では、ベリーは病院の中へ歩いて入っていける状態だったが、娘と私の介助が必要であった。救急の医者が検査を行った結果、ベリーは実際に脳梗塞であることが判明した。しかし、その時ベリーの主治医は休暇中で、近郊のリゾート地であるベア湖でボートを楽しんでいたため、ベリーの診察に駆けつけることができなかったのである。これは重大なことだった。なぜなら、主治医のサインなしでは、病院は脳梗塞に対する薬を投与できなかったからである。私たちは、大きなストレスと無力感、そして怒りを覚えた。時間が鍵を握っており、3、4時間以内に薬が投与されねばならない中、病院は主治医と連絡を取れなかったのだから。

3、4時間が過ぎても、まだ主治医は現れなかった。ベリーは今や麻痺の兆候を示し、病室のベッドに移された。ベリーがその部屋に移されたのは、そこがナースステーションの向かいであり、看護師たちがあらゆるケガなどからベリーを守るようにするためであった。しかし、どういうわけか、カズコと私がいないうちにベリーは体を起こしてベッドから降り、床に倒れてしまった。

この事故に関して、カズコと私は強い怒りを覚えた。

翌朝になった。息子たちと、カズコを含めた二人の娘ら、そして私はベリーの傍についていた。そこに、主治医が病室に入ってきた。カズコはためらうことなく、ソルトレイクシティの医者と連絡を取りつけたのでベリーをそちらに移す、と主治医に告げた。ベリーが必要とした時に主治医はいなかったのだから、彼はもう主治医ではなかったのである。薬を投与する期間を逃してしまったために、ベリーの麻痺は半身に広がっていった。また、話すことが非常に難しいようであった。私たちはすぐにベリーを理学療法士のもとへ連れて行き、そこでベリーは6週間にも及ぶ集中トレーニングを受けた。その間、家族や友人たちはベリーの元に通った。

ある日、アレン [クリステンセン] は一緒に歌える2,3人の友人をベリーの元へ連れて来てくれた。そのうちの一人がハル・カノンである。ハルは音楽家であり歌手で、様々なジャンルのフォークソング、とりわけカウボーイソングを得意としていた。ハルはギターを持ってきており、ベリーと一緒に弾いてみることにした。ギターを弾くには両手が必要である。ベリーは左半身を難なく動かしたが、右半身は完全に麻痺していた。ハルはベリーの後ろに座り、ベリーにギターを持たせた。そして、「自分は右手で弦をかき鳴らして歌うから、ベリーは左手を使ってコードを押さえてくれないか」と、優しく説得した。素晴らしい光景だった。ベリーは、ハルの歌にあわせて、左手でふさわしいコードを次々と見つけていったのである。そしてある日、ドイツの友人がベリーに電話をよこした。すると、ベリーは何のためらいもなく流暢なドイツ語で返事をしたのである。それを耳にした私たちは本当に驚いた。英語を話すことすら難しかったのに、ベリーはドイツ語を話していたのだから。

ようやく、ベリーを家に連れて帰ることができた。しかし、言語・理学療法の治療をその後も長い間受けなければならないというのが現実であった。また、記憶していた数百もの歌や、ジョークや、物語を思い出すことが難しいということも明白となった。字を読むことも困難になり、数字に関することは、もはや理解できなくなっていた。言語セラピーを通して短い会話をする能力は取り戻したものの、歌を思い出すことはできないままであった。そこで、アレンはあることを思いついた。週に一度、友人たちをベリーの家に招いて一緒に歌を歌うことである。それが音楽セラピーとなり、歌を思い出すことに繋がるのではないかとアレンは考えていた。

### 3. 集いし友たち (アレン・クリステンセン)

私とベリーは1998年にディナーパーティーで出会ったのだが、これほど親しい仲になるとは当時は思いもしなかった。ベリーはユタ州立大学でのフォークロア・プログラムを率いていて、ユタ芸術協議会のメンバーでもあり、数年間そこで議長を務めたこともあった。ベリーはギター弾きで、膨大な数の歌を知っていた。その数は800曲を超えており、多くは、聞いたことのない歌であった。古い歌だ。耳にしたことのある旋律であっても、馴染みのない歌詞のこともあった。航海時代の労働歌である舟歌、カウボーイソング、酒飲みの歌、黒人霊歌、賛美歌などである。それは人々の人生についての歌であり、何世代にもわたって受け継がれてきた歌であった。それが何百曲もあったのである。素晴らしかった。

2000年、ユタ州立大学はファイフ・フォークロア会議を開催した。そこに私は他の友人たち

と共に招待され、トーキン一家と歌を歌うことになっていた。ここにいる友人たちと歌ったのは、その時が初めてであった。披露したのは伝承歌で、すべてベリーとその家族が私に教えてくれたものであった。

ベリー・トーキンは、はじめから民俗学者であったわけではない。若い頃は、ユタ州南部でウラニウムの調査をしていた。ある日、ベリーは荒野に一人でいる時に体調を崩してしまった。良くなると信じつつ数日間苦しんだが、回復することはなく、すぐに気を失った。数日後、気が付くとナバホ族のホーガン〔泥や土で覆って作る、先住民の伝統的住居〕にいたという。その家族の名はイエローマンといった。イエローマン家の人々は、数週間にもわたってベリーに食事を与え、看病して病気を治してくれたのである。これが、ベリーにとってのナバホ生活の始まりであった。イエローマン家はベリーを養子にした。そこでベリーはナバホの言葉や風習を学び、ナバホの一員と認められるまでになった。ベリーは短い間であったが結婚をし、ナバホの保留地に住みながらヴァネッサという娘をもうけた。ヴァネッサについては、後でまた触れることにする。イエローマン家やナバホ族とベリーの関係は、今日に至るまで続いている。

2002年の真夏、ベリーが脳梗塞で倒れたことは、ミドリが先ほど述べた通りである。当然ながら、家族や友人にとっては非常に辛い時期であった。症状が一段落した後、医者は発作の終結を言い渡した。悪性で凶悪な脳梗塞であり、悲劇的な結果となった。ベリーは、すらすらと話すことが出来なくなった。心から好きだった歌も、すべて忘れてしまった。だが、不思議なことにドイツ語とナバホ語は忘れておらず、また旋律を口ずさむこともできた。ある日、カズコとミドリがベリーの友人に連絡をとり、彼らを病室に呼んで一緒に歌う機会をもうけた。その日やって来たのは8人だった。

その年の秋になると、ベリーが退院して家に帰ってきた。ある火曜日の夜、私たち7人とベリーは、ベリーの家に集まって歌を歌った。そして、冬の間中、私たちは毎週欠かさず集まった。それからというもの、集まる人数は徐々に増えていったが、火曜日の夜に歌うということは変わることがなかった。歌を忘れてしまったと思っていたベリーだが、この集まりを通じて多くの歌を思い出せるようになっていた。

ベリーのナバホの娘であるヴァネッサは、ベリーとナバホの文化を繋ぎとめる架け橋となった。伝統的なナバホ族の中では、病気は外的な力による攻撃だと考えられている。ナバホ族の養子であり民俗学者であるベリーは、外的攻撃から身を守って「安定」の状態を保つための、伝統的なナバホの治癒儀式に参加した。その儀式は、「唄い（“Sings”）」という名で知られており、3日ばかりで行われることが多い。中には「恵みの道（“Blessing Way”）」という儀式があり、複数の「唄い」が必要となる。これは、数週間・数ヶ月に分けて行うことが可能である。発作の前にも、ヴァネッサはベリーのために「唄い」のサイクルを用意したことがあった。しかし、このサイクルのうち三つの「唄い」が完了し、残りひとつとなった時、発作がベリーを襲ったのである。ヴァネッサは、ベリーが最後の「唄い」を終えるよう取りはからった。

火曜の夜の歌のメンバーは、ナバホの家族が及ぼした影響と同じく、発作後のベリーの生活における身体的・精神的な面に大きな影響を与えたと私は信じている。

#### 4. ひとりを癒すこと、皆を癒すこと（カズコ・トーキン）

ベリー・トーキンの娘である私は、歌と物語の中で大きくなった。歌や言葉は、父の歌を聞き、一緒に歌うことで覚えた。そして、歌うことを通して、自分の家族やその歴史についても私は学んだのであった。例えば、家族の皆がどこから来たのか、どのような職についていたのか、精神的・身体的な病の治療法、食文化に関わることなどである。また、他の文化における歴史や伝統についても知ることができた。父は様々な人を家に招いたからである。父の教え子たち、同僚、友人、隣人、そして世界中から来た人々と交流する中で、父が用意したこの多文化な世界でどう行動すべきなのかを私は学んだ。伝統は、人が日々の状況を構造的に理解したり、集団への帰属を認識したりする手助けとなる。異なる文化的状況では、自分のもつ伝統を柔軟に対応させていけばいいのだということを、私は人生の早い段階で学んでいた。我が家での歌は未だに伝統であり、私の人生を通して伝統であり続ける。歌うことは、両親と私にとって不可欠なのである。

物心ついた頃から、色々な人のグループが家に集まっていた。昔集まっていたグループの録音を聞くと、この「ちびちび飲みながら歌う」という伝統の中にも変化があることに気付く。集団力学が違うのである。現在のグループも独自の伝統を発展させてきたし、歌によってはアレンジを変化させ、その歌の伝統的な歌い方とは異なるやり方も試みてきた。また父は歌の集まりのリーダーであり、皆は彼のリードを見ながら歌っていたが、私たちは今、他の誰かのリードで歌う。新たな伝統がここにも生まれたのである。

歌を伝えることもまた、我が家の伝統である。父は記憶している膨大な量の歌を私に教えていたところであったが、そこで発作が父を襲ったのであった。それ以降、父は歌の記憶を全て失い、話すことも非常に困難となった。父にとって脳梗塞がもたらした現実にはトラウマであり、それは家族、友人、同僚など、私たち皆をもひどく混乱させた。

若い頃、父はナバホ族の一家に迎え入れられ、その後、ナバホの民話や伝承を学者として研究してきた。ナバホ族の人々にとって、病気とは平常な状態の崩壊であり、それを引き起こす要因は患者の外部にあるとされている。そして、病気は患者の家族全体に影響を及ぼすとも考えられている。そのため、誰かが悪い病気にかかると行われる儀式は、患者本人だけでなく、その家族やナバホ族全体を癒すために行われる。皆が病の影響を受けるからである。儀式には、家族、友人、隣人、よそから来た人など、皆が参加し協力する。そして呪医は、儀式のための伝統的な歌を、儀式の続く限り歌い続ける。

発作の起こる前、父はナバホの神聖な物語を研究しており、非ナバホ族の学者たちによる理解を深めるために議論や分析を重ねていた。ところが、ナバホの呪医は父に研究をやめるよう警告した。「スキン・ウォーカー [アメリカ先住民の伝承に登場する特殊能力者。望んだ動物に変身できる] や魔女は、物語を研究し、悪用しようとする」と、ある呪医が言った。「お前には死ぬ覚悟が、もしくは家族の誰かを代わりに失う覚悟があるのか」そこで、父の属するナバホのイエローマン家は、父や皆を起こりうる危機から守るため、すぐさま「恵みの道」の儀式の手はずを整えた。

「恵みの道」は4つの儀式によって構成されており、数ヶ月にわたって執り行われる。家族や

友人もやって来て、儀式を見守ったり参加したりする。そして、歌い手たちは伝統的な癒しの歌を歌う。父のための最初の儀式は、ユタ州ローガンにある父の家で行われた。二回目は、ユタ州スミスフィールドにある私の家で。そして三回目は、アリゾナ州レッド・メサにあるナバホ族の保留地で、父の知人一家のホーガン [ナバホ族の伝統的住居] にて行われた。しかし、四回目の儀式が行われる前に、不運にも発作が起こってしまったのである。父が動けるようになってから、四回目の「恵みの道」の儀式がアリゾナのチューバ・シティで行われた。そこは、同じナバホの保留地にある父の長女 [ヴァネッサ] の家であり、私たちの家からは遠く離れた場所であった。歌のグループからは、アレンとゲイル・クリステンセンが、家族と一緒に出席してくれた。

ローガンの家に戻ると、発作の起こる前に父と一緒に歌っていた友人たちが、父のために集まって歌を歌ってくれた。そして、アレン・クリステンセンやマイケル・スプーナーなどが、毎週家に集まって父と歌うことを決めた。そうすることで、父は言葉を思い出す刺激を受けながら、歌に触れることができる。皆は毎週やって来た。やがて集まる人数は増えていき、父と歌うことは毎週の伝統となった。この伝統は2002年から始まり、今なお続いている。父は歌自体を覚えていても、歌詞を思い出すことができなかつたが、時が経つにつれて多くの歌を思い出し、再び歌えるようになった。それだけでなく、少しばかりグループをリードできるようにもなったのである。

私たちは気付いた。父が自ら歌い、積極的にグループの歌に参加することが、治癒のプロセスを継続させるためには大切であることを。医者が体の内側から父を治療している一方で、私たちは外側から、歌と伝統の力を通して父を癒していたのである。「恵みの道」において演奏されたナバホの伝統的な歌も、治療に力を貸してくれた。父や私たちを、更なる危険から守ってくれたのである。

ナバホの歌に守られながら「恵みの道」から帰ったとき、毎週の歌の集いの重要性は、私たちにとって一段と大きなものになっていた。私たちは、歌を歌うという伝統を通して、父だけでなく、自分たちをも癒していたのである。

---

グループのパフォーマンスと、メンバー数名のインタビューは、YouTubeにて視聴可能。

ミドリとベリー・トーキンのインタビュー：<http://www.youtube.com/watch?v=0dbu-8EiKlk>

優れたフォークソングに必要な要素は？：[http://www.youtube.com/watch?v=IsddbF\\_v\\_0](http://www.youtube.com/watch?v=IsddbF_v_0)

民俗学者リン・マクニール (Lynne McNeill) のインタビュー：<http://www.youtube.com/watch?v=k67SmKhKGgc>

歌手アイザック・スプーナー (Isaac Spooner) のインタビュー：<http://www.youtube.com/watch?v=obLa2U87egs>

